
魔性の瞳（外伝）

冬泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔性の瞳（外伝）

【Nコード】

N59220

【作者名】

冬泉

【あらすじ】

あれは何？！ 恵久美流公国の第一公主、エクピル璃奈姫こと通称“お嬢”は叫んだ。仲間と共に挑んだ“影の回廊”で彼女が見たものは？ 「魔性の瞳」の外伝、ここにスタート！

アルカナの舞 - 00 「主要登場人物紹介」 (前書き)

本内容は多少のネタバレを含みます。誠に恐縮ですが、その旨ご了承ください。

アルカナの舞 - 00 「主要登場人物紹介」

■ あらすじ

漠羅^{バクラー}爾新王朝に属する恵久美流^{エクビル}公国の第一公主璃奈^{りな}姫——通称“お嬢”は、摩訶不思議な“アルカナの舞”の謎を解明すべく、故国恵久美流に戻ってきた。先の冒険で一緒になった仲間と一緒に、“お嬢”は危険な『影の回廊』に挑んだ……。

■ 主要登場人物

璃奈^{リナ}・恵久美流^{エクビル} 「Rina Ekbir 155cm/B」
恵久美流候国第一公主、通称“お嬢”。コモン史上、最強の“夢見”の力を持っている。明るく朗らかで（相当）お転婆な少女。神器である“杯”と“護符”を扱う唯一の人物でもある。（“杯”と“護符”に関しては、拙著「幻界創世記」をご参照）

ラルフ・ロビラー 「Ralf Robilar “Dragon Shield” 185cm/B」

通称“龍の盾”と呼ばれており、中原諸国の護り手たる“天の騎士”位（Knight of Heaven）を持つ。名だたる剣の使い手である。ヴェスベの森を守護する大緑龍ギラストールの盟友で、龍の宝珠を預かっている。“龍の盾”の名称は、ギラストールとのチェスの勝負に勝って、その時に贈られた紋章に由来する。

シュテファン・v・ラダノワ 「Stefan Radano va 188cm/O」

ヴェロンディ連合王国の下級貴族。後に“魔導卿”とも呼ばれる

ようになる非常に優れた魔法剣士。その孫が“紅い龍騎士”と呼ばれたカーシャ・ラダノワである。（カーシャは拙著「約束はいらない」に登場）

マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ「Margaret Lemria of Velondy 162cm/B」
ヴェロンディ連合王国国王アーサー・アトリムの妹姫で、希代の“夢見”の力を有している。通称「夢見姫」。魔剣士エリアドのパートナー。艶やかな黒髪に黒い瞳が抜けるように白い肌に栄える絶世の美少女だが、その漆黒の瞳は“魔性の瞳”と呼ばれ、災厄を呼ぶと一般に忌み嫌われている。ヴェルベの森の守護の剣「タイン」（Tyne）を帯びる。

真理査「Marisa 173cm/AB」
“灰の予言者”天査の双子の娘の一人で、「知恵と静寂」を司る。現世で唯一“夢見”を鍛えることが出来る“瞑想者の位”（Dreamer）を持つ。普段はヴェスベの森にある『知恵の塔』に住まう。長い銀系の様な髪に深い碧の瞳を持つ、物静かで理知的な女性である。

リュオン・恵久美流「Ryon Ekbir 197cm/O」
恵久美流候国の太守。妻に頭が（全く）上がらない。

シーマ・エクビル「Sheema Ekbir 169cm/AB」
恵久美流候国太守夫人。“賢夫人”の誉れも高い。

四審武官「Knightguardian Officer」
恵久美流首位の武官達。真砂貴、華衣、簾、透眞の四名からなる。それぞれが、漠羅爾古王朝時代に鍛えられた銘刀の帯刀を許されて

いる。

アルカナの舞 - 00 「主要登場人物紹介」(後書き)

本編は「GREYHAWK ANOTHER」の世界をベースにした一連の物語の一つで、「第一紀」(コモン歴585年〜)に属します。この時代に生きた“夢見姫”レムリアと“魔剣士”エリアドの外伝に当たります。

アルカナの舞 - 01 「龍の庭園」

■ 恵久美流公国 / 恵久美流 / 龍の館 / 庭園

恵久美流公国^{エクピル}。ドラミディ大洋に面し、漠羅爾旧王朝時代からの歴史を持つ古い国。漠羅爾新王朝になり、指導的な立場を新興のAKDに譲ったものの、その勢力は相変わらずウェスタン、イースタン共に一目置かれる存在である。国名と同じ名を帯びる首府恵久美流は、現在では旧宗主国是居府をも凌ぐ繁栄にあった。東西の交流も活発化し、イースタンの主要国はここに大使を置く様になった。

恵久美流の王宮、『龍の館』は街の中心部に位置し、背後に広大な『龍の庭園』を持つ。庭園の中には、岩が溶けた様な構造物があるが、これはスール神聖帝国との戦いで溶けた旧王宮の廃墟と言われている。

遙かヴェルボボンクから跳躍呪文で移動してきた一行は、この『龍の庭園』に現れた。ヴェルボボンクを午前中に出てきたが、まだここは早朝であった。

「・・・ここが恵久美流の高名な『龍の庭園』ですか」

周囲を見回して、シュテファン・v・ラダノワが呟いた。朝焼けに染まる靄の中、庭園には魔法的な明かりが灯され、幻想的な雰囲気が漂っている。

「ラダノワ卿は、こちらは初めてか。無理もない。封印戦争前は、漠羅爾諸国自体が鎖国していた様なものだったからな。通行証無し

で自由に行き来できるようになったのも最近のことだからな」

深い笑みを浮かべて、ラルフ・ロビラー“龍の盾”が相槌を打った。

「ここが、漠羅爾の始祖が作ったと言う庭園ですの・・・」

ゆっくりと周囲を見回している真理査も感慨深げ言った。

「お父様も、その昔こちらにいらしたのですわね。あの、“大地の鎧”を鍛えるために・・・」

「それは、灰の預言者様のことですね」

確認するようにレムリアが言う。その話は、二千五百年も昔に遡る。漠羅爾旧王朝の成立と、その繁栄。今は、僅かな名残がこの庭園に伝わるのみであった。

「守護者の長が創られた神器が、世に最悪の事柄が起きることを、未然に防いでくれました。忘れることの出来ない、忘れてはならない。記憶の一つです」

「・・・忘れ得ない、過去の記憶」

レムリアに向けた真理査の顔には、やるせない想いが浮かんでいた・・・。

アルカナの舞 - 01 「龍の庭園」 (後書き)

これは、「魔性の瞳」の6年後、コモン歴591年の世界です。お馴染みの名前が、そこに散見されると思います。基本的に、全てのお話は「幻界創世記」も含めて、「グレイホーク」の世界をベースにしています。パラレルに読まれると、更に世界の深みが感じられると思います。拙作ですが、宜しくお願い申し上げます。

アルカナの舞・02 「龍の姫君」

■ 恵久美流公国／恵久美流／龍の館／庭園↓宗主の間

早朝のすがすがしい空気を胸一杯に吸い込んで、璃奈^{りな}は思わず笑みを零した。

「・・・うん、気持ちがいいわ！ なつかしいお庭！ おうちに帰ってきたのかわ！ シェンドルに出かけるときは、王宮を出られるのでせいせいした気分だったけれど・・・やっぱりここに帰って来られるのはすてきなことね！」

同行の皆のほうに向かって、元気よく話しかける。

「さあ、小父さま、真理査さん、レムリアさん、ラダノワ卿、お父様とお母様の所へいきましよう！ ご案内しますわ！ きっと、待ちかねていると思うの。何でしたら、（とパチリとウィンクして）リナ専用の“近道”でご案内してもいいですよ」

言う間もなく、もう駆けだしている・・・向こうの花壇の先で皆に手を振って、

「・・・こちら、こちらですよ！」

そう言いながら、お嬢はまた駆けだしていった。

アルカナの舞 - 03 「龍の宗主」

■ 恵久美流公国 / 恵久美流 / 龍の館 / 宗主の間

『ゴオオン!!』

壮麗な銅鑼の音共に、重々しい扉が左右に開く。爽やかな涼風と、水のせせらぎが耳に心地よい。中央の噴水の後ろには大きな絨毯がひかれており、何人かの人物が座っている。

「おお、姫よ。」

立派な顎髭を蓄えた人物が立ち上がって、一行を迎えた。風貌は厳しいものの、その両眼には優しさが溢れている。

「よくぞ帰って参った。後ろにおられるのは、姫の御友人か？ 我と后に紹介してはくれまいか？」

扉が開いたためにふわふわと風になびく金髪を、さつと後ろに振り払うようにしてから、璃奈は背筋をのばして皆と共に父母の前へと進む。上品に一礼してから話し始める。

「お父様、お母様、ごきげんよう！ ただいま帰りました。先生がご一緒にいらしてくださいましたのです！」

と、龍の盾に向かってにつこりと笑いかける。

「そして、こちらはレムリア姫様。真理査様。そして、ラダノワ卿。それから、ヴェルボボンク子爵さまからお父様へ、特によろしくと

のことでしたわ。

・・・あと（と、少し口ごもるようにして）紫の騎士ヒラリーさまとお友達になったの。お父様とお母様にぜひご紹介したかったのだけれど・・・とてもいろいろなことがありました・・・」

アルカナの舞 - 04 「龍の賢婦人」

■ 恵久美流公国 / 恵久美流 / 龍の館 / 宗主の間

「そうか・・・こちらの方々に姫はお世話になっていたのだな」

“龍の盾” は旧知の間柄だが、他の三人は初見だった。不躰かとも思ったが、如何なる人物達に自分の娘が世話になったのか――多少なりとも、好奇心を押さえられない宗主だった。

一番左に立つのは、たおやかな若い娘だった。肩口でそのつややかな黒い髪を纏め、その深い黒曜石のような瞳はけぶるようだった。

その娘の隣は、非常に背の高い寡黙そうな異丈夫だった。剣こそ下げているが、その軽装な出で立ちは魔導戦士の装いに思えた。

璃奈をおいて顔なじみの“龍の盾” が護るように立ち、その隣にはもう一人若い娘が微笑んでいた。細くて小柄ながら、腰まで届く褐色の髪に、英知に輝くその明るい瞳には引き込まれるような印象を受ける。

“立派な人たちと知り合えたのだな”

多少親莫迦気味の恵久美流宗主は、親しげな笑みを浮かべながら、自分の娘が紹介する一人一人に丁寧に挨拶した。

「姫が大変お世話になりました。折角いらっしゃったのです。当地にゆるりと御滞在下され」

続いて、宗主の隣に腰掛けていた貴婦人が口を開く。

「皆さま、恵久美流によろこそいらっしやいました。娘が大変お世話になりましたようで、心から感謝を申し上げます」

その貴婦人は、自分は恵久美流宗主の妻で詩真しーまです、と名乗った。何処か璃奈に似た、それでいて落ち着きと包容力を兼ね備えた優雅な雰囲ハクラニ気を纏っている。そして、この婦人こそ“龍の賢婦人”と呼ばれ、漠羅ハクラニ爾新王朝の至宝とも呼ばれる大賢者でもあったのだ。近く遠くから、毎日詩真の知恵を借りに、訪問者が恵久美流公国エクレルに引きも切らず訪問に来ているのだった。

アルカナの舞 - 05 「龍の客人」

■ 恵久美流公国 / 恵久美流 / 龍の館 / 宗主の間

「宗主殿。斯様に早い時間にも拘わらず歓迎頂き、まことに忝ない」

最年長の“龍の盾”が、丁寧に頭を下げた。宗主と龍の盾とは旧知の間柄ではあるが、公式の場に於いては礼を尽くして応対するのが、いかにも実直な龍の盾だった。

「訳あって、こちらに参るに至りもうした。色々とお知恵を借りることもあるつかと思いますが、よしなに御願ひ致したい」

次いで、“龍の楯”の隣に立っていた真理査に順番が回った。

「初めてお目にかかります、宗主様。灰の予言者が娘、真理査と申します」

古代漠羅爾の古き作法に則り、真理査は腰を深く屈め、優雅にお辞儀した。

真理査に次いで、レムリアが前に進み出た。中原諸国の作法に則り、スカートの裾を両手で軽く持ち上げる。

「マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ・アンド・ムーンスヤドウと申します。ヴェロンディ連合王国自由騎士にして、万生の創世剣“阿修羅”を帯びるエリアド・ムーンスヤドウが妻でございます。璃奈姫様の御両親であらせられる、宗主様、妃殿下にお目見えすることができて、心から嬉しく思っております」

深く、お辞儀するとレムリアは優しい笑みを浮かべた。

最後がラダノワ卿だった。

「シュテファン・オフ・ラダノワと申します」

短く言うと、深々と頭を下げる。

「龍の宗主様並びに奥方様にお目通りが出来、誠に欣快に存じます」

「あ・・・」

「ああ・・・これがお作法のつらいところね。この調子でご挨拶の儀礼が進んでいったら、あさってになってもお話が終わらないわ・・・」

璃奈は誰にも分からないように小さくため息をついて、行儀良く挨拶の進行を待っている。それでも、優しいに微笑んでいる母には「飽きちゃったよ」サインを送っている。

恵久美流宗主の奥方であり、「西方の宝玉」と呼ばれる優しい賢夫人、詩真・恵久美流は娘の行儀に微かに顔をしかめてみせた。

“これもお仕事なのですよ”

優しく諭すような声が聞こえてくるかのようだ。詩真は娘を見て微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922o/>

魔性の瞳（外伝）

2011年10月5日02時19分発行